**目を覚ましているのを見られる僕たちは幸い―年間第19主日Ｃ年**

ヨハネ・ボスコ　林　大樹

**第一朗読：過越の夜に（知恵の書18章6－9節）**

6節に「あの夜」とありますが、これはエジプトの初子（ういご）が殺された過越の夜、つまりエジプト脱出の夜を指しています。出エジプト記11章4－7節によれば、真夜中に主（しゅ）がエジプトの初子を撃つけれども、イスラエルに対しては「犬ですら、┅┅うなり声を立てません」と予告されていました。エジプトには大混乱となる出来事も、イスラエルにとっては不安の種とはなりません。なぜなら、「彼ら（イスラエル）はあなた（神）の約束を知って、それを信じていた」からです（6節）。

神の約束を信じる「神に従う人々」には救いがあるけれども、神の言葉を無視してイスラエルの脱出を認めなかった「敵ども」には滅びがくだります（7節）。神は「反対者への罰に用いたその出来事」で、イスラエルを光栄へと招きます（8節）。

このように、神に従うイスラエルと神に敵対したエジプトを対照的に描くのは、「知恵の書」が書かれた目的と関係しています。この書はギリシア文化の魅力に心ひかれ、先祖伝来の信仰から離れようとするディアスポラの（パレスチナを離れて暮らしている）ユダヤ人に向けて書かれています。彼らの心を信仰へと引き戻すためには、このような書き方が必要だったのです。

**第二朗読：信仰によって（ヘブライ人への手紙11章1－2節、8－12節）**

1節の「望んでいる事柄」「見えない事実」とは、「神の約束の実現」を指しています。神が約束した確かな約束ですから、それに対する人間の姿勢は「信仰」でしかありません。しかし、確かさは私たちの信仰にあるのではなく、神の約束にあります。その意味で「信仰」は、神が与える「希望」と同じです。「信仰」は、他の者が主観的確信としか見えない事柄に、客観的根拠を提供します。つまり、神の約束が必ず実現することを、それが実現していない今「信じる」ことは、神の約束の確かさを他の者に示すことになります。そのような信仰を示した人々として、今日の第二朗読はアブラハムとサラを取り上げます。

アブラハムはカナンの地に入っても、そこには定住せず、移動生活をする遊牧民が用いる「幕屋」に住みました（9節）。幕屋に住んだということは、彼の立場が寄留者であったことを表しています。アブラハムが寄留者として約束の地カナンに住んだのは、カナンはアブラハムが召し出された旅の中間点に過ぎず、「神の都を待ち続けていた」からです（10節）。

年老いたサラは「約束をなさった方は真実な方である」と信じて、子どもを授かりました（11節）。アブラハムとサラの歩みを支えたのは、神は「真実な方」であると信じた信仰です。「真実な方」を信じた彼らは、「海辺の数えきれない砂」のように多くの子孫に恵まれました（12節）。神の約束の確かさは、このような恵みの豊かさとなって現されました。

**福音：何が土台となるのか（ルカによる福音12章35－40節）**

第二朗読は「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」で始まっています。この意味はさまざまに解釈されていますが、「信仰が望まれている事柄（＝見えない事実）の土台となるとき、それがすでに実現していると言えるほどに確信している」という意味だと思われます。

37節ｂは「望まれている事柄（＝見えない事実）」に相当します。「主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」という「望まれている事柄」が信仰という土台の上に置かれるとき、「それがすでに実現していると言えるほどに確信している」という現実となります。

このような確信を持つなら、「腰に帯を締め、ともし火をともしている」こと（35節）は重たい義務ではなくなるし、思いがけないときに到来する人の子のために「用意する」こと（40節）においても油断することがありません。「見えない事実」を確認しているからです。

**今日の朗読のまとめ**

今日の福音は、「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸い」であり（37節ａ）、「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸い」（38節）、と述べます。なぜなら、「主人が帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」からです（37節ｂ）。この37節ａと38節は、「目を覚ましているのを見られる僕たちは幸い」という表現によって対応しています。

ここで「目を覚ましている」と訳された動詞（グレーゴレオー）は、Ⅰコリント書16章13節に、

目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく（おおしく）強く生きなさい。

とあるように、キリスト者の基本姿勢を表す言葉の一つです。

37節ｂに述べられた「望まれている事柄（＝見えない事実）」を信仰において確信しているので、目を覚ましていることができるのであって、その逆ではありません。

すなわち、人の子がいつ来るのか、神の最終的な介入がいつ起こるのか（40節）、誰も知りません。だから、油断せずに「目を覚ましている」ことが必要となりますが、主人が帯を締めて給仕する食事が待っているのですから（37節ｂ）、不安に脅えながら「目を覚ましている」のではありません。救いの希望に燃えて待っています。キリストが救いのために来るという希望が私たちを支え、「目を覚ましている」ことを可能にします。

将来への希望は人の目を覚まさせます。喜びの食事が待っていることを知る私たちは、未来に目を奪われて現在を忘れるのではなく、むしろ未来を信じているからこそ現在を真剣に生きます。将来を希望のうちに待つ者は、安心して現在へと目を向けることができます。

「目を覚ましている」ことがキリスト者であることの「しるし」なのです。

2022年8月7日（日）　鍛冶ヶ谷教会　主日ミサ　説教